名簿資料から読み解く第 3 海兵大隊軍楽隊の変遷

七條めぐみ　愛知県立芸術大学音楽学部講師（音楽学）

1．はじめに

本稿は、19 世紀末～ 20 世紀初頭にかけて中国・青島（チンタオ）で活動したドイツ軍の第 3 海兵大隊軍楽隊に関して、楽団の変遷と第 1 次世界大戦の勃発にともなう人員の変動を、複数の名簿資料から明らかにするものである。第 3 海兵大隊軍楽隊については、ドイツの租借地、青島における音楽生活の中心を担った団体として、演奏活動の傾向や本国ドイツの演奏文化との関連が明らかにされてきた（志村 2016）。1914 年（大正 3）8 月に始まった日独戦[1]によって青島が陥落したことで、約 4,700 名のドイツ兵が俘虜（ふりょ）[2]となり、青島の守備にあたっていた軍人の多くは日本各地の収容所に留め置かれた。筆者はこれまで、ドイツ兵俘虜による音楽活動の特徴を明らかにする立場から、俘虜の演奏プログラムと第 3 海兵大隊軍楽隊のそれを比較することで、両者の関連性を明らかにし、青島の軍楽隊と日本の「俘虜楽団」が共通の演奏傾向をもつことを指摘した（七條 2022）。

このように、第 3 海兵大隊軍楽隊については、演奏プログラムの分析が進み、その活動傾向が普仏戦争から第 1 次世界大戦までのドイツにおける軍楽隊に広く見られるものであったこと、また日本においてはドイツ兵俘虜の音楽活動の直接的なモデルとなっていたことが明らかになっている。一方で、近代ドイツの音楽文化を反映する団体であったにもかかわらず、第 3 海兵大隊軍楽隊がどの程度の規模であり、どのような発展過程をたどったのか、これまで確かなことは言われていない。また、第 3 海兵大隊軍楽隊の大部分は非戦闘員であったことから、青島の陥落後は俘虜とならず、アメリカにわたって演奏活動を継続したとされる。この過程について、軍楽隊のうち、どの程度が渡米したのかは明らかにされていない。そこで本稿では、ドイツの軍楽隊の構成員を示す複数の名簿資料と、第 3 海兵大隊軍楽隊が渡米する際に日本側が作成した名簿を突き合わせることで、軍楽隊がどのように発展したのか、また日独戦前後にどのような経緯をたどったのかを明らかにする。その上で、日本で活動したドイツ

兵俘虜の楽団が、構成員の点で軍楽隊とどのような関連があったのかを考察する。

２．第 3 海兵大隊軍楽隊の変遷

第 3 海兵大隊軍楽隊の成立と活動

19 世紀末、ヨーロッパ列強が中国大陸に進出する中、ドイツもまた東アジアにおける軍事・通商の拠点を欲していた。しかし、中国ではすでにイギリス、フランス、アメリカによる沿岸地域での居留地建設が進められ、相対的に後れを取るドイツは不利な立場にあった。そこでドイツが各国勢力の地理的間隙をついて拠点に選んだのが、山東半島のふもとに位置する膠州湾（こうしゅうわん）、および青島である。1897 年、山東省でドイツ人宣教師が殺害されたことをきっかけに、ドイツは中国に対し膠州湾一帯の 99 か年租借、鉄道敷設権、鉱山採掘権等を認めさせる独清条約を締結する。その後、港湾設備の建設とインフラ・市街地の整備が進められ、人口数千人の漁村に過ぎなかった青島は、瞬く間に西洋式の港湾都市へと様変わりした [3]。一時は「東洋のベルリン」とも呼ばれるほど発展した青島では、ドイツ企業による対中貿易が展開されるだけでなく、西洋民間人を対象とする文化・芸術活動が花開いた。また、教育面ではドイツ帝国の国立学校やミッションスクールがつくられるとともに、1905 年以降は中国人に対してもドイツ式の教育を施そうとしていた。

膠州湾および青島は、東アジアにおけるドイツの軍事拠点であった。1894 年、皇帝ヴィルヘルム 2 世（位 1888-1918）の海軍拡張政策により、東アジア艦隊が創設され、1897 年に青島租借が始まると同地の守備にあたる専属の部隊が組織された。その規模は、第 3 海兵大隊 [4]1,180 名を筆頭に、下部組織である野戦砲兵中隊約 100 名、工兵中隊約 150 名、そして膠州砲兵隊 750 名であった（瀬戸 2006, 35-36）。第 3 海兵大隊と野戦砲兵中隊、膠州砲兵隊には軍楽隊が配備されていた。第 3 海兵大隊軍楽隊は、成立当初は 18 名の「楽団員 Hoboist」がいたとされ、その後、1903 年に楽長としてオットー・ヴィレ Otto K. Wille（1876-没年不詳）を迎えたことで発展し、1905 年には 41 名の規模になったとされる（Huguenin 1912, 147）。彼らの役割は、軍事演習や式典での演奏といった、いわゆる軍楽隊としての職務にとどまらず、青島市内や近隣都市 [5] でのコンサー

ト活動を行う、音楽生活の中心となっていた[6]。青島においては、平日の夜に行われる定期演奏会を主軸に、週末の「日曜コンサート」、不定期開催の海浜コンサートやガーデンコンサートなど、さまざまな演奏会を開催した[7]。

1914 年に日独戦が勃発すると、第 3 海兵大隊軍楽隊は楽団としての任を解かれ、衛生兵となった。青島陥落後、軍楽隊はジュネーヴ条約の取り決めにより戦時俘虜とならず、天津を経て中立国アメリカにわたった。日本での収容を免れた隊員たちは、アメリカでドイツ系移民の多い州を中心に演奏活動を行った。しかし、1917 年 4 月 6 日のアメリカ参戦をきっかけに、楽団員はジョージア州フォート・オーグルソープ市の俘虜収容所に収容され、第 1 次世界大戦の終結後にようやく解放され、ドイツに帰国することができた[8]。

このように、軍楽隊員は原則として、日独戦の俘虜とはならず、アメリカに渡ったのだが、中には久留米収容所でオーケストラを率いたオットー・レーマン Otto Lehmann（1892-1971）のように、軍楽隊員でありながら俘虜となり、日本で収容生活を送ったものもいた。こうしたケースについて、軍楽隊が日独戦前後にどのような過程をたどったのか、これまで注目されてこなかった。また、第 3 海兵大隊軍楽隊の規模についてはユグナンの先行研究以上のことが言われず、具体的な楽器編成も分かっていない。そこで、次項では軍楽隊の構成員を示す名簿資料から、第 3 海兵大隊軍楽隊がどのように発展したのかを明らかにする。

名簿資料にみる軍楽隊の発展

『ドイツ帝国軍楽隊員年鑑 Militär-Musiker-Almanach für das Deutsche Reich』（以下：『年鑑』）および『ドイツ帝国軍楽隊員住所録 Militär-Musiker-Adreßbuch für das Deutsche Reich』（以下：『住所録』）は、ドイツ帝国陸海軍の軍楽隊員名簿を所属部隊ごとに掲載する定期刊行物である。前者は 1879 ～ 99 年、後者は 1902 ～ 13 年にかけて出版された。軍楽隊員は階級、氏名、担当する楽器を記され、指揮者については、生年月日と着任年月日も明記されている。筆者はこれまでに、1899 年の『年鑑』と、1902 年、1905 年、1909 年、1913 年の『住所録』を参照した。表 1 は、これらの名簿資料に見られる第 3 海兵大隊の軍楽隊員数を、階級別にまとめたものである。

表 1　第 3 海兵大隊軍楽隊の階級別人数

	指揮者	軍楽隊員					鼓手（こしゅ）	合計
		副曹長	軍曹	下士官	歩兵	その他		
『年鑑』1899	1	0	0	2	14	0	1	18
『住所録』1902	1	0	2	11	6	1	1	22
『住所録』1905	1	0	1	18	10	0	1	31
『住所録』1909	1	0	29	12	11	0	2	55
『住所録』1913	1	1	22	14	11	0	1	50

第 3 海兵大隊軍楽隊の指揮者は、1899 年の時点では下士官のツァーン Zahn（名および生没年不詳）、1902 年の時点では軍曹のフリッツ・ケーデル Fritz Ködel（1872- 没年不詳）が務めていた。この頃の第 3 海兵大隊軍楽隊は全体で 20 名前後の規模であり、同時期に 30 ～ 40 名規模の軍楽隊を備えていた第 1、第 2 海兵大隊に比べると小さな楽団だと言える [9]。しかし、1903 年にヴィレが指揮者に就任すると、第 3 海兵大隊軍楽隊は 1905 年には 31 名、1909 年には 55 名に達し、第 1、第 2 海兵大隊軍楽隊に引けを取らない規模へと発展する。さらに、1913 年の第 3 海兵大隊軍楽隊は 50 名であるが、同年の第 1 海兵大隊軍楽隊は 38 名であることから、第 3 海兵大隊軍楽隊が海兵隊としては随一の規模の楽団となっていたことが窺える [10]。1909 年から 1913 年にかけては楽団員が減少しているが、それを差し引いても、第 3 海兵大隊軍楽隊は第 1 次世界大戦が始まる直前まで 50 名規模を保っていたと言える。

『住所録』によると、ヴィレが楽団の指揮者に就任したのは 1903 年 2 月 11 日のことである。ヴィレは当初、「軍楽長 Stabhoboist」を名乗っていたが、1911 年の『ドイツ膠州領の住所録』[11] では「楽長 Musikmeister」となっており、以降この肩書を用いている。ヴィレが就任する以前は、楽団の指揮者は数年単位で交替していたが、1903 年以降は楽団の存続する限り一度も交替しておらず、第 3 海兵大隊軍楽隊の体制が安定したと言える。

ヴィレの就任以降、楽団は人数を増やすだけでなく、楽器編成においても拡大と多様化の路線をたどった。表 2 は、1902 年から 1913 年までの第 3 海兵大隊軍楽隊の楽器編成を記したものである。『住所録』では通常、楽団員の氏名の横に 2 種類の楽器が書かれている。それは例えば、「リヒャルト・キューネ、フリューゲルホルン、（ヴァイオリン［ソロ］）」（MMAdr 1902, 405）のように、一方の楽器は括弧に入れられている。括弧がどのような意味を持つのか、『住

所録』では説明がされていないが、地の文で書かれている楽器が管楽器または打楽器、括弧に入れられているのが弦楽器、管楽器、打楽器、鍵盤楽器であることから、前者は吹奏楽編成で担当する楽器、後者はオーケストラ編成で担当する楽器と見て差支えないだろう。したがって、前述のキューネに関しては、吹奏楽ではフリューゲルホルンを、オーケストラではヴァイオリン独奏を担当した人物ということが考えられる。

1902 年から 1913 年にかけての吹奏楽編成の楽器を比較すると、年によって多少のばらつきや人数の増減はあるものの、木管楽器（フルート、オーボエ、クラリネット、ファゴット）、金管楽器（トランペット、音域の異なるホルン、トロンボーン、テューバ）、打楽器という大枠には変化がないことが分かる。1905 年と 1913 年には吹奏楽編成に撥弦楽器のリラが含まれるが、これを担当する人物はいずれも木管楽器を兼任しており、リラのみを演奏していたのではない[12]。一方で、オーケストラ編成の楽器を比較すると、1902 年から 1905 年にかけて二管編成がほぼ整い、1913 年には三管編成にも近づくほど、編成の拡大が続いたことが読み取れる。弦楽器に関しても、1902 年にはヴァイオリンからコントラバスまでを合わせても 8 名だったのが、1909 年と 13 年には 26 名のアンサンブルを形成するまでになった。さらに、1905 年にはピアノ、1909 年にはイングリッシュ・ホルンとハープが追加されるように、新たな楽器の加入も見られる。こうしたことから、第 3 海兵大隊軍楽隊はヴィレの指揮者就任以降、大規模かつ多様な楽器を含むオーケストラ編成へと変化していったと言える。

このような楽団の拡大と多様化は、当時の演奏傾向と密接に関係していた。例えば 1906 年 2 月 6 日に開催された「第 11 回定期演奏会（交響曲）」では、後半にヴァーグナーの楽劇《トリスタンとイゾルデ》より前奏曲と、リストの交響詩《タッソ》が含まれる[13]。まさしく、イングリッシュ・ホルンやハープが必要とされるプログラムである。『住所録』からでは、これらの楽器が正確にどのタイミングで軍楽隊に追加されたのかを知り得ないが、遅くとも 1909 年までには担当する人員がいたことは確かである。また、1908 年 3 月 7 日の『青島新報（チンタオしんぽう） Tsingtauer Neueste Nachrichten』では、「増強された海兵隊軍楽隊のコンサート」という記事において、同年 3 月 5 日に開催された「ヴェーバー・

表２　第３海兵大隊軍楽隊の楽器編成の移り変わり（※１）（※２）

	吹奏楽編成	オーケストラ編成
1902	フルート1、クラリネット［B管］3（※3）、クラリネット（Es管）1、トランペット2、フリューゲルホルン1、ホルン2、アルトホルン2、バリトンホルン1、トロンボーン1、テューバ（B管）1、テューバ（F管）1、小太鼓1、グロッケンシュピール1	フルート1、クラリネット［B管］2、トランペット2、ホルン2、トロンボーン1、ティンパニ1、大太鼓1、ヴァイオリン（独奏）1、第1ヴァイオリン1、第2ヴァイオリン1、ヴィオラ2、チェロ1、コントラバス2
1905	フルート2、オーボエ1、クラリネット（ソロ）1、クラリネット［B管］3、クラリネット（Es管）1、ファゴット2、トランペット3、フリューゲルホルン2、ホルン3、アルトホルン2、バリトンホルン1、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、テューバ（B管）2、テューバ（F管）1、ティンパニ1、大太鼓1、ドラムス1、リラ1	フルート2、オーボエ1、クラリネット2（独奏を含む）、ファゴット2、トランペット2、ホルン3、トロンボーン2、バス・トロンボーン1、ティンパニ1、ドラムス1、ヴァイオリン（独奏）1、第1ヴァイオリン3、第2ヴァイオリン2、ヴィオラ2、チェロ2、コントラバス4、ピアノ3
1909	フルート3、オーボエ1、クラリネット［B管］8、クラリネット（Es管）2、ファゴット3、トランペット8、フリューゲルホルン3、ホルン6、アルトホルン4、バリトンホルン2、トロンボーン7、テューバ（B管）3、テューバ（F管）2、小太鼓1	フルート2、オーボエ2、クラリネット［B管］1、イングリッシュ・ホルン1、ファゴット3、トランペット4、ホルン3、バリトンホルン1、トロンボーン3、小太鼓1、ティンパニ1、第1ヴァイオリン9、第2ヴァイオリン5、ヴィオラ5、チェロ2、コントラバス5、ハープ1、ピアノ2
1913	フルート4、オーボエ1、クラリネット（B管）7、クラリネット（Es管）2、ファゴット1、トランペット［B管］4、トランペット（Es管）2、コルネット1、フリューゲルホルン2、ホルン7、アルトホルン4、バリトンホルン2、トロンボーン4、テューバ（B管）4、テューバ（F管）2、リラ1、大太鼓1、ドラムス1、シンバル1	フルート3、オーボエ3、クラリネット［B管］2、バス・クラリネット1、イングリッシュ・ホルン2、ファゴット2、トランペット2、ホルン5、トロンボーン3、大太鼓1、ティンパニ1、ドラムス1、第1ヴァイオリン8、第2ヴァイオリン4、ヴィオラ4、チェロ（ソロ）1、チェロ4、コントラバス5、ハープ1、ピアノ7

※1…『住所録』では「第1フルート」「第2フルート」のように、同一の楽器内での次数が付けられているが、本表では各楽器の人数を把握するために、次数ではなく個数を記した。ただし、ヴァイオリンに関しては第1ヴァイオリンと第2ヴァイオリンを別のパートとして個別に計上した。
※2…一人の楽団員が複数の楽器を兼任するケースも見られるが、やはり楽器ごとの人数を把握する観点から、本表では別のパートとしてそれぞれ計上した。
※3…クラリネットはEs管のみ記載があるため、特に記載のない場合は、一般的に広く用いられるB管と判断し、［ ］で記した。

ヴァーグナーの夕べ」の演奏会評が掲載される。そこでは、ヴィレが青島の聴衆に大規模な作品を聴かせようとするが、近代オーケストラでは金管楽器が多様化し、弦楽器パートも細分化されるため、決して数の多くない軍楽隊では再現が困難であると書かれている。しかし記事には「53 人の音楽家の力が、これらの不利な状況を解消し、《マイスタージンガー》と《トリスタン》の前奏曲の演奏を可能にした」（TNN, 7 Mar. 1908, 7）と書かれ、不完全ながらもヴァーグナーのオーケストラ作品が上演されたことを物語っている。ヴィレに関してはしばしば、「優れたヴァーグナーの指揮者」（TNN, 7 Mar. 1908, 7）あるいは「近現代の音楽においてベストを尽くす」（TNN, 8 Feb. 1906, 2）といった表現がなされていることからも、19 世紀後半の後期ロマン派の管弦楽作品に精通し、それを軍楽隊において再現することに尽力していたことが窺える。1905 年以降の『住所録』に確認される軍楽隊員の増加、楽器編成の多様化は、このような指揮者ヴィレの音楽性と結びつくものだったと考えられる。

３．日独戦前後の軍楽隊の動き

1913 年～ 1915 年の軍楽隊員の変動

日独戦の開始前後に、第 3 海兵大隊軍楽隊がどのような経緯をたどったのかは、これまで確かなことが言われていない。しかし、アジア歴史資料センターに所蔵される「獨墺國人船客来往ノ件」という文書には、軍楽隊を含む非戦闘員を乗せた船が日本の長崎港に寄港して、アメリカへと向かった際の記録が残されている。この文書は、1915 年（大正 4 年）6 月 8 日に長崎県知事李家隆介（りのいえたかすけ）が、内務大臣大浦兼武（おおうらかねたけ）に宛てた公文書で、中国からサンフランシスコへ向かうために長崎港に入港した「サイベリア号」に乗る人員の全容を伝えている。

> 「サイベリア」號ハ本月七日午前七時三十分管下長崎ヘ入港シタルヲ以テ調査スルニ仝船ニハ獨逸人ノ團体旅行者九十七名非團体十一名計百八名並ニ墺國人一名乗船シ居タリ而シテ團体旅行者ハ獨逸軍人若ハ其ノ家族等ニシテ仝軍人等ハ何レモ青島ニ於テ軍務ニ従事中同地陥落後日本軍ヨリ解放セラレ南京、天津、北京、上海等ニアリシガ右軍人中最高官タル「フオン、グンター、フユルスター」及「ヴィクトル、プレーツケ」等ハ在支那駐在

獨逸領事及在帝國東京駐在米國大使ニ交渉ヲ遂ケ本國政府ヨリ旅費ノ支給ヲ仰キ全部ヲ帰国セシムルコト［後略］

文書では、船に乗っていたのは青島陥落後に日本軍から解放された人々、すなわち非戦闘員であり、陥落直後には中国に残っていたが、ドイツ軍将校が在中ドイツ領事および在東京アメリカ大使に交渉することで、日本政府が旅費の負担をして「帰国（実際には渡米）」できることになったと書かれている。この時乗船していた人物の内訳は、海軍軍医 14 名、妻 5 名、子女 6 名、薬剤師 1 名、軍楽長 1 名、妻 1 名、子女 2 名、看護長 4 名、妻 1 名、子女 2 名、海軍建築技師 1 名、妻 1 名、看護婦 1 名、大阪収容所に収容中の俘虜の妻 1 名、軍医の召使 2 名（ここまで一等船客）、軍楽隊下士官の妻 1 名、衛生隊下士官 7 名、衛生隊員 12 名、軍楽隊下士官 29 名、軍楽隊歩兵 5 名、ドイツ商人など 11 名、オーストリア人 1 名（ここまで二等船客）であった。したがって、「サイベリア号」には軍楽長 1 名とその家族、および軍楽隊員のうち下士官 29 名、歩兵 5 名の合計 34 名が乗船していた。

ここで注目すべきは、「サイベリア号」に乗船していたのは、第 3 海兵大隊軍楽隊の全員ではなかったということである。1913 年の『住所録』では軍楽長以外の隊員が 50 名確認されるため、「サイベリア号」での乗員とは 16 名の開きがある。ただし、1913 年の『住所録』と 1915 年の「獨墺國人船客来往ノ件」では 2 年の隔たりがあるため、筆者はその間を補填する資料として、1914 年 7 月に刊行された『ドイツ膠州領の住所録』を参照した。表 3 では、1913 年の『住所録』で確認される軍楽隊員の氏名と階級をまとめ、そこに『ドイツ膠州領の住所録』および「獨墺國人船客来往ノ件」で確認されるかどうかの印をつけた[14]。

表 3　1913 年～ 1915 年の名簿資料に見られる軍楽隊員の比較

	『住所録』（1913）			『ドイツ膠州領住所録』（1914）（※1）	「獨墺國人船客往来ノ件」（1915）
	階級	名	姓		
1	音楽監督	Otto	Wille	○	○
2	副曹長	Ludwig	Vogelbein		
3	軍曹	Eugen	Mittau		
4		Karl	Heinemann		
5		Robert	Wolff		
6		Adolf	Wernecke		
7		Max	Sieg		
8		Karl	Gädicke		
9		Adolf	Thierbach	○	○
10		Josef	Satzky	○	○
11		Hugo	Haupt	○	○
12		Arno	Schwagarus		
13		Richard	Brüger	○（副曹長）	
14		Ernst	Hennecke	○	○
15		Friedrich	Schumann	○	
16		Heinrich	Schindling	○	○
17		Ferdinand	Bittner	○	○
18		Hermann	Schöne	○	○
19		Adolf	Treger	○	○
20		Karl	Bicknese	○	○
21		Kurt	Bubner	○	○
22		Paul	Hilffe		
23		Robert	Wacker		
24		Heinrich	Metze	○	○［Metzel］※2
25	下士官	Otto	Wangemann	○	○
26		Karl	Hinkelmann	○（軍曹）	○［Rinckelmann］※2
27		Paul	Kühn	○（軍曹）	○
28		Hermann	Steinberg	○（軍曹）	○
29		Kurt	Pfeifer		
30		Wilhelm	Gutschmidt	○（軍曹）	○
31		Otto	Teubner	○（軍曹）	
32		Otto	Oegenfurtner		
33		Arthur	Lorenz	○（軍曹）	○
34		Martin	Reinhardt	○（軍曹）	○
35		Johann	Bohlsen		

表3（続き）

36	下士官	Bernhard	Fritsche		
37		Paul	Heft		
38		Richard	Nitschke	○	※3
39	一等兵	Richard	Nebrich		
40		Emil	Berg	○（下士官）	○
41		Ferdinand	Steffen	○（下士官）	○
42	二等兵	Georg	Apel		
43		Anton	Endres		
44		Wilhelm	Wriebt		
45		Erich	Lietze		
46		Paul	Gawron		
47		Josef	Weller		
48		Emil	Jann		
49		Richard	Eckner		
50	鼓手（軍曹）		Buschmann		
			『ドイツ膠州領の住所録』（1914）以降で見られる隊員	Kaiser	○
				Häubner	○
				Krüsel	※3
				Dischleid	○
				Borger	○
				Fischer	○
				「獨墺國人船客来往ノ件」（1915）のみで見られる隊員	Metze, H.
					Hauber, H.
					Bammel, H.
					Heumann, C.
					Koppen, A.
					Mende, G.
					Leisner, H.
					Metze, F.
					Zach, M.

※1…『住所録』（1913）から階級が上がっている者は（　）で記した。

※2…『住所録』（1913）とは表記が異なるが、ファーストネームと階級から同一人物と推定される。「獨墺國人船客往来ノ件」（1915）における表記を［ ］で記した。

※3…「俘虜名簿」（1917）に記載がある者をあらわす。

『ドイツ膠州領の住所録』では、軍楽隊員は下士官までの姓しか記されず、それより下位の歩兵隊員については一切の記述を欠く。そのため、1913年から1914年にかけての軍楽隊員の変動をすべて追うことはできないが、下士官以上の階級については動向を把握することができる。1913年の『住所録』と1914年の『ドイツ膠州領の住所録』に含まれる名簿を相互に比較すると、前

者にのみ記載される人物が 15 名確認される。逆に、後者にのみに記載される人物が 5 名存在し、下士官以上に限っても、1 年の間に軍楽隊員の顔ぶれがかなり変わっていることが分かる。さらに、1914 年の名簿を 1915 年の「獨墺國人船客来往乃ノ件」に含まれる名簿と比べると、前者にのみ記載される人物が 5 名確認される。これらの人物については、1914 年 7 月の時点では第 3 海兵大隊軍楽隊の一員であったが、1915 年 6 月の渡米船にはいなかったという解釈が成り立つ。つまり、彼らは日独戦にともなって俘虜になったか、何らかの事情で中国大陸にとどまったという可能性が考えられる。なお、1915 年の「獨墺國人船客来往ノ件」では、1914 年の『ドイツ膠州領住所録』には記載されない楽団員も 9 名確認できるが、これは 1914 年の名簿が下士官以上の階級を扱うものであることから、その時点で楽団に在籍していた歩兵隊員とも考えられる。このように、第 3 海兵大隊軍楽隊の顔ぶれは、日独戦開始の直前まで入れ替わりが見られた上に、青島陥落後には楽団の全員が渡米したわけではないということが確認できた。

俘虜になった軍楽隊員

表 3 ではさらに、1914 年の『ドイツ膠州領住所録』には見られるが 1915 年の「獨墺國人船客来往ノ件」には見られない 5 名の人物（網掛け部分）に関し、日本側の発行による「獨逸及墺洪國俘虜名簿」（1917 年、以下：「俘虜名簿」）に記載されるかを確認した。残念ながら、5 名のうち「俘虜名簿」に記載があったのは、リヒャルト・ニーチュケ Richard Nitschke とクリューゼル Krüsel の 2 名にとどまり、あとの 3 名（リヒャルト・ブリューガー、フリードリヒ・シューマン、オットー・トイプナー）は見当たらなかった。記載があった 2 名のうち、ニーチュケについては久留米収容所の楽団でチェロとトロンボーンを担当した、楽団の主要人物の一人であることが分かっている [15]。これまで、ニーチュケの収容前の経歴は不明であったが、第 3 海兵大隊軍楽隊の名簿資料を突き合わせることで、彼が 1913 年までに軍楽隊に加入し、青島にいた頃はバリトンホルンとチェロを演奏していたことが明らかになった。一方で、クリューゼルに関しては、「俘虜名簿」および「俘虜労役の件」[16] から、名古屋収容所での音楽活動に関わっていたマックス・クリューゼルであることが特定できる。た

だし、彼は 1914 年の『ドイツ膠州領住所録』において初めて確認されるため、第 3 海兵大隊軍楽隊での担当は不明である。

さらに、これまで筆者が日本側の資料を調査する中で、軍楽隊員でありながら俘虜となった人物があと 6 人いることが判明している[17]。その中で、オットー・レーマン、ヘルマン・ヴァイゼンボルン Hermann Weisenborn、マックス・キューネ Max Kühne の 3 名は、俘虜となった時点で第 3 海兵大隊軍楽隊の二等歩兵であった[18]。彼らは、1913 年以前の『住所録』には記載がないため、1914 年以降に軍楽隊に加わったと推測されるが、二等歩兵であるため『ドイツ膠州領住所録』では存在を確認することができない。ただしレーマンに関しては、彼自身が書いた履歴書から 1914 年 2 月 27 日に青島に到着し、まもなく第 1 ヴァイオリンの次席となったことが分かっている（松尾 2005, 171）。彼のようなケースについて今後、1914 年の新聞記事などを参照することで、開戦前後にどのような過程をたどったのか、より詳細に検証することが必要だろう。

4．おわりに

本稿では、青島で活動した第 3 海兵大隊軍楽隊の発展と日独戦前後の動向について、複数の名簿資料から検証した。第 3 海兵大隊軍楽隊は、発足当初は第 1、第 2 海兵大隊軍楽隊と比べても規模の小さい楽団であったが、1903 年のヴィレの指揮者就任以降は拡大を続け、第 1 次世界大戦の直前には海兵隊として随一の規模を誇る楽団になっていたことが確認された。このような傾向は、楽器編成においても同様であり、特に 1905 年以降は楽団員の充足だけでなく、新たな楽器を取り入れた編成の多様化が見られることが明らかになった。先行研究で指摘されるように、1905 年は海軍の主導で軍楽隊予算が拡充され、文化・教育面でも中国人に対する「教化」政策がとられ始めた年であった（志村 2018, 3; バウワー 2007, 25-26）。軍楽隊の人員の増加や楽器編成の多様化は、文化を用いて効率的に植民地統治を行おうとするドイツ側の思惑と連動するものだったと推測できよう。また、楽団の拡充は演奏会プログラムとも連動していたことが指摘できる。楽器編成が多様化したことで、ヴィレが得意とする「近現代の音楽」、すなわち後期ロマン派以降の作品を演奏することが可能となり、楽団はヴィレの音楽性を反映した活動を展開するようになったと言える。

本稿の後半では、日独戦前後に第 3 海兵大隊軍楽隊の構成員がどのように変化したのかを検証した。1913 年～ 1915 年に発行された名簿資料を相互に比較することで、軍楽隊は日独戦の開始直前まで人員の入れ替わりがあり、また青島陥落後に渡米したのは軍楽隊の全体ではなかったことが明らかになった。ただし、渡米しなかった楽団員の中で、俘虜になったことが確認できるのは 2 名にとどまった。そのほかに、1914 年に軍楽隊に加入し、俘虜になったと見られる人物が少なくとも 3 名いることが分かった。

この結果を踏まえ、日本の収容所におけるドイツ兵俘虜の音楽活動に視点を移してみると、俘虜楽団に占める軍楽隊員は、第 3 海兵大隊軍楽隊以外の隊を含めてもごく少数であることが、あらためて浮き彫りになったと言える。俘虜楽団と第 3 海兵大隊軍楽隊は、大規模な管弦楽作品とポピュラーな楽曲を区別しつつ共存させるというプログラム構成の点で似た傾向を持つが、楽団の構成員においてはほとんど連続性がなかったと言える。したがって、俘虜楽団の演奏傾向は青島の音楽生活をモデルにしていると言うよりは、近代ドイツのコンサート文化を反映するものではないかと考えられる。今後、俘虜たちが職業音楽家の乏しい中でどのようにオーケストラを実現したのか、とりわけ楽器や楽譜といった物資の調達の面でどのような動きがあったのか、軍隊組織と民間企業や支援団体との関りに注目しながら明らかにしたい。

本研究は JSPS 科研費 JP22K19967 の助成を受けたものである。

注

[1] 第 1 次世界大戦中、中国で青島および膠州湾一帯を租借するドイツに対し、日本が日英同盟を理由に宣戦布告して行った戦争。「青島攻防戦」とも呼ばれる。

[2] 戦争などにおいて敵国に捕らえられた軍人を指す語としては「俘虜」と「捕虜」の 2 つが使用されるが、本稿では、当時一般的に用いられ、先行研究でも使用されている「俘虜」を用いる。

[3] ドイツ租借時代の青島の人口は、1913 年の統計では 55708 人（ドイツ人 1855 人、その他欧米人 214 人、日本人 327 人、中国人 53212 人）だった（瀬戸 2006, 56）。

[4] 第 3 海兵大隊に先立ち、第 1 海兵大隊（キール）と第 2 海兵大隊（ヴィルヘルムスハーフェン）

はドイツ帝国成立以前のプロイセン王国時代から存在し、それぞれに固有の軍楽隊組織があった。

[5] 上海での定期公演のほかに、北京や天津でも公演を行っていたと言われる（Toeche-Mittler 1975, 173）。

[6] 一方で、膠州砲兵軍楽隊と野戦砲兵中隊軍楽隊は、相対的に規模も小さく、祝典や軍事演習での演奏を担う団体だったと推測される。これに関して、膠州砲兵隊に所属し、日独戦で俘虜となったカール・クリューガーは、膠州砲兵軍楽隊は「第 3 海兵大隊軍楽隊とは違い、職業音楽家からなるものではなかった」（Krüger 2001, 85）と証言している。なお、徳島の板東収容所で「徳島オーケストラ」を率いたヘルマン・ハンゼン Hermann Hansen（1886-1927）は、この膠州砲兵軍楽隊の隊長だった。

[7] 定期演奏会は、1905/06 年のシーズンを例に挙げると、10 月から 5 月までに 16 回開催された。これらは「ポピュラー」「交響曲」「ワルツとオペレッタ」「オペラ」「クリスマス」のいずれかに分類され、それぞれ異なる演奏プログラムを展開していた。第 3 海兵大隊軍楽隊の活動に関して、演奏機会や演奏会場の種類については志村 2016、定期演奏会のプログラムの特徴については七條 2022 を参照されたい。

[8] アメリカにおける第 3 海兵大隊軍楽隊の活動については、Bowles 2008 を参照されたい。

[9] 第 1 海兵大隊軍楽隊は 1899 年には 40 名、1902 年には 42 名で構成された。同様に、第 2 海兵大隊軍楽隊の人数は 1899 年に 33 名、1902 年に 38 名である（MMAlm 1899, 407-409; MMAdr 1902, 404-405）。

[10] 1913 年の第 2 海兵大隊軍楽隊に関しては、指揮者の名前が記されるのみで隊員の具体的な人数、氏名は不明である。

[11] 膠州湾一帯および山東半島に拠点をもつドイツ系企業、官公庁、金融機関、軍事組織のリストおよびそれらの名簿資料である。軍楽隊に関しては、下士官以上の隊員の姓が記されている。筆者はこれまでに、青島生まれのドイツ人地理学者、ヴィルヘルム・マッツァト博士の青島研究をまとめたウェブサイトにて、1901 年～ 1914 年の『ドイツ膠州領の住所録』を参照した。本稿では『住所録』を補填するものとして、適宜本資料を引用する。

[12] 1905 年にはヨーゼフ・トライツがオーボエとリラ、1913 年にはエルンスト・ヘネッケがフルートとリラを兼任していた。

[13] 全体のプログラムは次の通り。第 1 部　ケルビーニ：《アナクレオン》より序曲、ベートーヴェン管楽八重奏曲　変ホ長調 Op. 103、シューマン：交響曲第 1 番　変ロ長調 Op. 38。第

2 部　ヴァーグナー：《トリスタンとイゾルデ》より前奏曲、ヴァインガルトナー：弦楽のためのセレナーデ、リスト：交響詩《タッソ》。

[14]「獨墺國人船客来往ノ件」は手稿資料であるため、名簿のドイツ語部分をジャクリーン・ポルスト氏に翻刻していただいた。心より感謝申し上げる。

[15] ニーチュケおよび久留米収容所の楽団の活動については、松尾 2005 を参照されたい。

[16] クリューゼルは楽器制作技術をもっていたことから、収容中に名古屋楽器製造合資会社より職工として労役申請を受けた。

[17] 日本に収容された俘虜のうち、軍楽隊員であることが分かっている人物については、七條 2022 に詳細を記した。

[18] 残りの 3 名はそれぞれ、膠州砲兵隊、野戦砲兵中隊、砲艦ヤーグアル号に所属する軍楽隊員だった。本稿は第 3 海兵大隊軍楽隊に主眼を置くため、この 3 名については割愛する。

参考文献

名簿

Adreßbuch des Deutschen Kiautschou Gebiets. 1901-1914. Tsingtau: Otto Rose.

Militair-Musiker-Almanach für das Deutsche Reich. 1899. Berlin: Verlag der Deutschen Militär-Musiker-Zeitung.［MMAlm］

Militär-Musiker-Adreßbuch für das Deutsche Reich. 1902-1913. Berlin: Verlag der Deutschen Militär-Musiker-Zeitung.［MMAdr］

公文書（すべてアジア歴史資料センター所蔵）

「獨逸及墺洪国俘虜名簿」 1917 年 6 月改訂版発行 「俘虜情報局条例制定ニ関スル件」所収　Ref. B07090900100

「独墺国人船客来往ノ件」 1915 年 6 月 8 日作成 「独国人本邦通過ニ関スル件／分割２」所収　Ref. B07091074900

「俘虜労役ノ件」『欧受大日記』1918 年 7 月号所収　Ref. C03024941900

新聞

『青島新報 Tsingtauer Neueste Nachrichten』［TNN］

論文・書籍

七條めぐみ　2022 「大正時代の日本におけるドイツ兵俘虜の音楽活動――『俘虜楽団』の目指した音楽実践」 井上さつき（監修） 森本頼子（編著）『音楽と越境――8 つの視点が拓く音楽研究の地平』東京：音楽之友社 12-34

志村恵　2016 「ドイツ租借時代の青島における音楽活動について」 日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』第 13 号 : 25-40

――― 2018 「なぜドイツ人は第九を初演できたのか？ドイツ租借時代の青島の音楽活動について」 2015 年～ 2017 年度科学研究費助成事業研究成果報告書

瀬戸武彦　2006 『青島から来た兵士たち――第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』 東京：同学社

バウアー，ヴォルフガング　2007 『植民都市・青島　1914-1931――日・独・中政治経済の結節点』 大津留厚（監訳） 京都：昭和堂

松尾展成　2005 『日本＝ザクセン文化交流史研究』 岡山：大学教育出版

Bowles, Edmund A. 2008. “From Tsing-Tao to Fort Oglethorpe: The Peregrinations of a German Military Band during World War I.” *Journal of Band Research* 44(1): 1-24.

Huguenin, C. 1912. *Geschichte des III. See-Bataillons*. Tsingtau: Adolf Haupt.

Krüger, Karl. 2001. *Von Potsdam nach Tsingtau: Erinnerungen an meine Jugendjahre in Uniform 1904-1920*. Bremerhaven: Jürgen Krüger.

Toeche-Mittler, Joachim. 1975. *Die Geschichte unserer Marschmusik, III. Teil: Armeemärsche*. Neckergemünd: Kurt Vorwinckel Verlag.

ウェブサイト

“Tsingtau.org: Beiträge zur Geschichte Tsingtaus (Qingdao) – 1897 bis 1953” https://tsingtau.org/（2023 年 2 月 8 日閲覧）